

---

# 上海コネクション 2006

きりもんじ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

上海コネクション2006

### 【Nコード】

N2484K

### 【作者名】

きりもんじ

### 【あらすじ】

2006年12月船で上海経由で義烏まで仕入れに行きました。その旅日記です。

## 出航

20061205

還暦。6年ぶりの旅だ。

阪急で三宮へむかう。出航は12時。十分間に合う。

と思っていたら、ポートターミナルには誰もいない。道順にそって歩いているとガードマンが、

「上海行きですか？もう皆さん乗ってますよ」

えー？まだ1時間前なのに。走り走り窓口へ向かった。

「お店のほうにも電話しました10時に」

「ハア10時？」

2時間前じゃんと思いつつ時計を見ると11時30分。

出国審査、税関と駆け抜けて乗船口へと向かう。

「そんなに走らなくてもいいですよ」

「急いで急いで」

係員が勝手なことを言う。

やっと横付けされた船に着いた。まさかここを登るの？はしごのような階段を1階から3階ぐらいまでよじ登る。

「ほんとに気をつけてくださいね」

片言の日本語。クルーの人だ。

「いつもこんなんですか？」

「今日は100人ほどの女学生さんが先に上がりました。この時期はとも少ないです」

12時。船は静かに出帆した。

メロデーが流れる。それは『北の春』だった。

見送りのドラムもテープも何もない、静かな旅のスタートだ。

夕食まで時間があるのでインスタントラーメンを自販機で買った。

湯を入れて食べようと思ったら、箸がないスプーンもない。

服務員を呼ぶと、隣のおじさんはお酒が出ないと叫んでいた。  
中国の旅の始まりである。

上海に着いたらすぐに杭州から義烏へ高速バスだと思って  
インフォメーションで聞いた。

「私は汽車で行くからバスの事は知らない」

片言の日本語。後は知らん振り。

『ここ案内所だろ？』

言おうとしたが諦めた。

『上海について聞けばいいのね、はいはい』

「そうそう」

彼は笑顔でそう答えた。

中国の旅は笑顔が全てだ。

やっとな夕食になって400円のマーボー豆腐をたのんだ。

出てきたのは小さな皿に大きな金属のスプーン。

せめてレンゲならと思ったが、全くの不釣合い。

しかしもうここは中国。『中国の旅は笑顔が全て』

好！好！好！



## 夕陽

20061206

一日中船の中。二等船室は二段ベッドの8人部屋でなかなか快適である。

隣の部屋は華僑や酔っ払いがいたりして夜遅くまで騒いでいたようだ。

朝6時、まだ真っ暗だ。大庁に出てテレビを付けるとNHKが映った。

もうすぐ黄海だ。朝7時半。大声で船内放送になる。

おかゆとザー菜、焼きそばとお菓子。お代わり自由で無料。

今日はとても穏やかでこんな日は珍しいと同室の人が言っていた。

案内所で上海の軽軌道のことを聞いた。英語も日本語も片言で、結局筆談が一番効果的だった。

午後2時デッキに出るいい天気だ。見渡す限りの水平線。

昔の人はこうしてずっと沈む夕陽を追いかけていったのだ。

逆に、稲作も漢字も仏教も昇る朝日を目指して伝わっていった。黄砂の影響か沈む夕陽はことのほか大きく美しく沈んでいった。

## 還暦上海―1

20061207

いよいよ60歳、還暦の朝だ、上海が近い。

多くの小船が浮んでいる太陽が左手に輝いているという事は、船は大河を南下しているということだ。

両眼はクレーンとドック。多くの船が接岸し又行き来している。それが延々と続く。大きく大河を曲がってやっと都会が見えてきた。さらに1時間。船が速度を落とす。上海のシンボル明珠塔だ。

間近で対岸にゆっくりと接岸する。

ターミナルは大掛かりに工事中だ。船の上から現場が丸見えだ。プレハブで工人たちが洗濯やら顔洗ったりやら大勢いる。

皆農村からの出稼ぎでこれらの人たちが興隆中国の大底を支えているのだ。

農村戸籍と都市戸籍にはつきりと分かれていて自由に居留はできない。

これらの人々が盲流となつて反政府運動になることを当局は恐れている。

相当な数の人たちが農村から都会に流れ込んできている事は間違いない。

やっと上陸して南站に向かった。中国元にはいつでもどこでも換金できると思っていたのが大間違い。

タクシーを拾つてまずは銀行へ。ところがどこも数時間待ち。

番号札を取って待たされる。

これじゃいかんとビッグホテルで換金と思いきや、  
どこのホテルでも断られる。空港は遠い。  
どうしたものか？

郊外のすいてそうな中国銀行（換金はこれのみ）を探す。  
やっと1時間で換金できた。これがなけりゃ何にも始まらないのだ  
よ。

メーターを見ると2元が95元に跳ね上がっていた。  
仕方がないか、最悪のスタートだ。さあ、これからがんばろー！

## 還暦上海Ⅰ 2

宇宙船のようななどでかい南火車站内に入る。  
当天售票処、ここで当日分が買えれば運がいい。  
でなければ長距離バスだ。

「義烏、特快、1 帳」とメモに書く。

「特快、没有、快速、好？」

「OK」

「4 2 元」

安い！少しついてきたぞ。

4 人がけの窓際に座った。

向かいの男はむしゃむしゃとパンをかじっている。

そこにビジネスマンがやってきて席が違うぞという。

横の学生風の男と3 人皆一斉に切符を見る。

パン男が私の横に座りなおした。ごめんともなんとも言わない。  
ビジネスマンはあからさまにいやな顔をして向かいに座った。

テーブルにはパンくずと紙袋、ペットボトル。ビジネスマンは  
「ふん」という態度を示したままケータイでしゃべり始めた。

パン男はパンを食べ終わりくずを袋に乗せる。  
学生はケータイでメールしている。  
あっちこっち、ケータイでしゃべっている。  
そのうち列車は動き出した。

車内販売が次から次へと来る。新聞、お菓子、果物、飲み物。何度も来る。そのうちビジネスマンが梅の実を買った、すると学生も梅の実を買って二人ともぼりぼりとかじり始めた。

二人とも種をパンの紙袋の上に次々と捨てていく。パン男はちまきを食べ始めた。笹の葉が1枚1枚その上に捨てられていく。

ビジネスマンは新聞を読みながらぼりぼりと梅を食べ続けている。パン男も新聞を買って読み始めた。そして2時間後。杭州の駅で皆降りてしまった。

テーブルの上には紙袋を大きくはみ出しててんこ盛りの梅の種と笹の皮。シートには新聞が散乱し学生が座っていたところはシートがめくれていた。

### 還暦上海―3

外はもう真つ暗だ。

杭州から又人が乗り込んできた。

多くの荷物を抱えたおじさんが何か言った。

「我不知道」

と答えたらどっかに行ってしまった。

テーブルとシートは散らかったまま火車は動き出した。

『あと1時間くらいか』と一息ついたとき、

黒ぶちのめがねをかけた青年がシートのめくれを直しながら、向かいに座った。何かつぶやいたが分からなかった。

青年は散らかった新聞を手にとって読み始めた。

『もうすぐ義烏かな？この青年に聞いてみたいが』  
なかなか取り付く島がない。

思い切って切符を示して、

「義烏下次、阿？」

通じたか？何か答えてくれた。

どうも本人も義烏で降りるらしい。

メモに、

『木彫工芸品、猫』

と書いて示すと。彼は名刺をくれた。

『木製民芸品 費衛』

とある。メモに”包装盒”と書く。

ケータイで動画を見せてくれたが、ちょっと違う。

『木彫猫、梟』と書いてスケッチをすると、  
あっちからこっちから人が覗きにきた。

「トンヤン！」と叫んで一人が、  
『東陽、??鎮』と書いてくれた。

## マッサージ？

真つ暗闇の義烏駅に降りる。

件の青年がバスが安いからと言って、  
車掌に何か言っている。

2元（約30円）。席を譲ってくれたりベビーを  
皆であやしたり、なごやかな乗り合いバスだ。  
30分ほどして、

「あの三元里賓館がそうだよ」と下ろしてくれた。  
信号のない道路。結構車がスピード出してる。  
皆すいすいと渡っている。真つ暗なのに。

不屈の愛国の村三元里にちなんだ賓館、とはいっても、  
かなり3流のビジネスホテルだ。1泊80元に値切って、  
とにかく2泊することにした。

気が付けば昼も夜も何も食べてない。

もう夜9時だ。荷物を置いてすぐ外に出た。

中国人向けの安宿や羊肉屋が暗がりの中に何軒が見える。

羊肉屋に入って隣の人が食べてるのと同じのを頼んだ。

おいしそうな羊耳妙肉唐辛子がピリツと効いてて、  
きくらげがっぱいでとても美味しかった。

さあ部屋へ戻る、もうくたくただ。

部屋は古いがカードロックでセミダブル。水洗トイレシャワーつき。  
11時、エアコンは点けたままテレビを消してさあ寝るぞ。

ところがいきなりドアがノックされた。何事だ？  
念のためにドアチェーンをかけて少し開けた。

「マッサージ？」

「呼んでないよ。メイユ、メイユ」  
扉を閉めると又激しく叩く。

ドアチェーン越しに見ると若い女二人だ。

「マッサージ？」

「メイユ」

と言うと、

「ユー！」といって無理矢理開けようとする。

あぶないあぶない。あの時とつさにドアチェーンをかけたが、  
もしそうしてなければと思うとぞっとする。

12時。やっと還暦の夜は更けていった。

## 義烏―1

20061208

午前7時起床。熟睡。が、まだ船に乗ってるように時折ゆれる。

シャワーはやっぱりいつまでたっても水しか出ない。

洗面台で顔を洗って、靴下を洗濯していたらガタンと音がして、下の管が外れて水が足元をぬらした。裸足でよかったがここは中国、万事この調子と思っててちょうど良い。

タクシーで東陽へ向かう。もうすぐもうすぐといってから30分。結局100元（約1500円）取られた。それでも木雕街を探してくれた。

50店舗以上の木彫りの店が軒を連ねている。

全てが伝統的な古木の木彫ばかりだ。

確かに猫や兎もありはしたが。

それはまさに古典的な芸術品だった。

チエンマイにあった様な現代アート猫を探していたのだが、これは全くお呼びでない。

すぐさま引き返し、義烏国際商貿城へ向かった。

義烏にある3大バザールの中でも一番でかい。

どういうわけかS字型のビル、<sup>フーデン</sup>福田？期と？期という。

福田？期は10年前にできたビル主に宝飾、雑貨、玩具など。

1階玩具だけで3000ブース。2階宝飾で3000ブース。こん

な調子。

福田？期は数年前にできた新館で工具、時計、めがねなどで？期の10倍規模。

この夏博覧会が開かれ、さらにいま福田？期を建築中だ。世界の中国雑貨はここから全世界へ発送されるという。

値段は交渉次第だが10分の1、20分の1はざらで。ものによつては100分の1。ここがバイヤーの腕の見せ所だ。とにかく立ち止まらず歩いていくだけで1日はかかる。

近代的大バザールといったところだがそこは中国、赤子がいたり、脇でご飯食べたり、サトウキビの皮を放つたり。唾はいたり。しょっちゅう掃除はしているのだが、

歩きつかれて炒飯を食べてホテルに帰る。

卵炒飯5元（75円）スープ付きで大盛りでおなかいっぱい。

## 義烏Ⅰ2

もう足が棒のようだ。チェンマイ風の木猫が見つからなければ、賓王市場と篋園市場を当たってみよう。

賓王市場はいわゆる古いタイプのバザールで日用品ばかり。早めに切り上げ、人力車に乗って篋園市場に向かった。

ここは半分がブースで後は古い形のバザールと露店がわんさか。思えば今まで世界中の色々なバザールを見てきた。

超特大はイスタンブールのグランバザール。屋根つきドーム内に迷路のように古典的なブースが続く。アフガンコートにパズルリングをたくさん買った。

カイロもでかかった。香水と象嵌。露店バザールではマドリードの蚤の市。

火縄ライターをたくさん買った。チェンマイの夜市。木猫、シルバ

ー。インド、更紗、バチック、銀指輪。バリ島のろうけつ染め、などなど。

よく考えると義烏の国際商貿城いかにでかいかがよく分かる。ここはひとつ腰をすえてかからねば。目的は木猫と鎖だ。

### 義烏Ⅰ 3

20061209

朝は鶏蛋拉麵、昼は羊炒飯。

老板は回教徒で青い目のウイグル族。

蘭州拉麵はどの町にもある安くてうまい店だ。

店頭の串焼きがとても美味。

キオスクもあちこちにあるので義烏の地図を買った。

今年の博覧会の地図で詳しく国際商貿城や他の市場の内容が詳しく書いてある。これは宝物だと5冊買った。

今日はとても寒い。間違いなく零下だ。

なのに物乞いが結構いる。凍死しないか心配だ。

バスセンターの近くのキオスクでゆで卵を買った。

100元をくずす。多分じつと見られていたんだろう。

子供の物乞いが来た。仕方ないので1元やると。

どこで見てたのか次々と幼子が現れて、

腰に抱きつき押し競饅頭、離れようとはしない。

「わかった、わかった。1元づつやる」

幼子達は笑って、「勝った！」というような顔をした。

## 義鳥―4

20061210

午前中は福田？期の西側にある長春区を探ることにした。  
長春区は1Fが店舗で2、3、4階が住居になっている。  
まだ新しい店舗ビル街だ。

水晶、陶器、金工、造花、ぬいぐるみ。やっと木工芸品。  
見つけたあの魚釣りをしている木猫。ここで作ってるんだ。  
ものすごい数のバリエーションがある。林明工芸。

一つ一つ確認して床においていく。

いくつかは在庫がないとかで戻された。

結局値切りに値切って1個10元（約150円）。

ひとまず木猫は見つかったがチェンマイほどではない。

福田？期でチェンを探すことにした。

福田？期は2階がズーとアクセサリーのブースだ。

金属チェンだけで数千軒はある。

小豆チェン43cmもある。

さらに絞り込んで100軒ほど。

どこも大体2・3元（35円）位までは下げる。

しかしこれでは話にならない。

明日は朝からチャレンジだ。

## 義鳥Ⅰ5

20061211

朝から昼過ぎまで歩きに歩いて59件ほどのブースで  
値段交渉をする。1000本2000本3000本と  
まとまるとやつと1個1元。これが限界か？

歩き疲れてベンチで休んでいると、又一軒見つけた。  
客がいる。ベンチの裏側だ。この客がいなくなったら  
覗いてみるかと思っていたら、

一人の女が近づいてきて「いくら？」えっ？日本人？  
黙って成り行きを観察していた。

「前とおんなじ」

「じゃあ、3000本ね」

「OK！」

なるほど日本人の行きつけらしい。

一回りしてここを最後にチャレンジしてみよう。

「称好。これ3000本いくら？」

「1個0.3元」

ええっ？1個0.3元？紙に書いてもう一度確認する。

1個0.3元だから3000個は900元。

「間違いないか？」

「間違いない」

0・3元で1個4円50銭。やったー！

小売値の100分の1だ。卸値の10分の1。  
ここに決めた。

1袋120個36元。30袋3600個1080元。

即金で払ってざっと検品する。

ずしりと重い。20kgはありそう。

又来年くると言っただけ。ここは英語も日本語も通じない。  
筆談がベストの商談だった。はたして毎年こうなのかは  
全く分からない。ここは中国何が起きるか分からない。

## 杭州

朝、少年チャンピオンを持って羊肉屋へ行くと、とても喜んでくれた。日本にはラーメンあるかと聞く。見渡す限りラーメン屋ばかりだと言うと、ウソ付けという。

長春二区林明工芸を再訪する。特大の木猫を買ったためだ。

一個50元。二個で50元に？と言うと、だめと無愛想に言う。取って置きのビッグコミック、表紙が可愛い猫。そつと手渡す。

ぱらぱらとめくって、

「わからないから、いりません」

全く無愛想な女だ。結局45円で二つ買った。包んでもくれない。大きな木猫を抱えてバスターミナルへ。

高速バス、53元。1時間半で杭州に着いた。

近くの賓館に泊まろうと思ったら、外人お断り。

日本人が泊まれないホテルや旅館は結構あるみたいだ。

上海に行くなら東駅のほうが良いと言うわけで、タクシーに乗った。東駅の近くで100元くらいのホテルを、と頼んだのに。1泊300元。ポーターがさつさと荷物を運んでいく。

「ままま、まてーっ！」

「？」

「日本円しか持っていないから両替してくる。荷物を返せーっ！」

もとのタクシーに飛び乗る。

「旦那中国銀行でつか？」

しばらく黙って走らせて、

「いかにええ。金はある。100元までのところいうたやろ。うまく見つけたら、そのまま西湖まで乗るから」

「ほなあちこちさがしてみまひよ」

てなわけで、東駅の近くに110元のシャワーエアコンつきそれ以外は最低のホテルが見つかった。

あちこち建設ラッシュの凸凹道を走って西湖。白蛇伝で有名な『断桥残雪』の断桥を渡った。

## 東台路骨董街

20061213

杭州汽車東站から2時間で上海南站に着いた。

東台路骨董街付近で安宿を探そう。

タクシーを拾うと女の運転手だ。

「東台路」と紙に書いて渡したら、  
知らないと言う。

何とかあちこち探しながら着いた。  
重い荷物を抱えて骨董街を歩いていると、  
変なおじさんが話しかけてきた。

「どこから来た？」

「日本だ」

「なにをする？」

「100元の安宿探す」

「150元ならある」

彼の後についていくと、近くの飯店の裏のホテル。  
まあまあだ。3日泊まるか。

150元X3日＝450元。まあいいか。

ところが「押金50元」と紙に書く。

押金？なにこれ？

担保金のことなのだが、これが分からずに散々もめた。

とにかく後から帰ってることが分かって

500元払う。残金は100元しかないが  
まあ何とかなるだろう。

眼鏡を修理。80元残金20元。

あと二日半。1日8円でやれるか？

ミネラルウォーター1元。

蛋炒飯4元。

小籠包3元。

ここは中国何とかなるだろう。

## 上海ぶらぶら

20061214

朝食に街角で包子を3個。1個0.6元（9円）。  
中に青野菜が入っていてとても美味しい。

9時にホテルへ戻ると、昨日のおじさんが立っている。  
横に大風呂敷を抱えた人がいる。

とにかく見てくれと言って中に入ろうとする。  
入れたらお仕舞いだ。ホテルの入り口で押し問答。  
そのまま包みを開けさせた。

なんだか分からない骨董品がいくつか出てきた。  
仏像みたいなものもある。昨日木工芸品を探している  
と言ったのがまずかったようだ。

「とにかくもう日本に帰るところだからお金はない  
アイハブノーマニー！」と叫ぶと、二人は去っていった。

さあ今日は上海を歩き回ろう。西へ一大会址、周公館、芸術街。  
東へ豫園。あちこち掘り返していても歩き辛い。

数年前に家族で来たときはほんの1時間だったが今回はゆっくりと。

福祐商城の2F東巴の工芸品があった。  
買いもしないのに丁寧に教えてくれた。

向かいの福源商城の二階は漢方薬ばかり。  
沈香閣周辺の露店はおもしろい。毛沢東語録50元。

超一等地に松林茶店という店があった。

老街の南角に骨董市場と言う古い二階建てがあつて  
木の小物の猫と梟を見つけた。白檀の根付らしい。  
一日中歩き疲れてぐっすりと休んだ。

## 魯迅公園

20061215

虹口足球场で軽軌道を下りて魯迅公園に向かう。  
途中で3回も道を聞かれた。中国人に見えるのか。

いい天気だ。公園に入るとこまを放り回していた。  
広島の鉄ゴマの要領だ。赤いこまで音がする。

公園は老人の憩いの場。バドミントンに足での羽球。  
太極拳。将棋。マージャン。胡弓の合奏。ダンス。  
色んなことをやっている。

広い公園だ。池や起伏もあって癒される。  
魯迅墓をやっと見つけてお題目を三唱した。  
これからは毎年来ますと誓った。

魯迅公園をまっすぐ下って多倫路文化名人街まで歩く。  
日式食堂や旅館が多い。日本租界だった所だ。  
ブロンナードに銅製の人形像がぽつんぽつんと  
たったり座ったりしているおしゃれな道だ。

路地の入り口に昔ここで活躍した文化人の大きな銘板が  
立ててあった。魯迅を始め10人ほど。

## 興龍の予感

20061216

孫文が民主革命を起こし、

毛沢東が共産化を実践し、

？小平が改革開放路線を実現した。

この勢力争いを調整したのが周恩来だ。

劉少奇は走資に走って謀殺された。

極左と走資の力比べ。

走資の？小平は何度も殺されかけたが

周恩来の計らいで生き延びた。

毛周亡き後ついに改革開放路線が確定していく。

文革から天安門にかけて国連加盟をはさんで

それをピークに世界を呑み込む大型爆龍タンカーは

ゆっくりと大きく右に舵を切った。それが定まった今、

中国は大きくゆっくりと全てを呑み込んで

その方向に確実に進んでいく。

年々加速度がついてくるはずだ。どの都市に行っても

どこもかしこも工事と建設の槌音が響いている。

地方や田舎にもテレビと携帯が行き渡ってきた。

ということは中央の情報が広大な中国の隅々にまで

確実に行き渡るとのことだ。場所と時間に関係なく

大中国は進化の情報を瞬時に地方と中央、老若男女をとわず、

全世界と共有し始めた。ちょうど45年前、日本でテレビが全国に行き渡った直後と同じだ。追いつき追いこせ、世界に負けるな、がむしろ日本、小柄な日本。

今大柄な巨大タンカーが何もかも呑み込んで加速し始めた。もうどうにも止まらない。この10年でものすごいことになる。それが中国とインドだ。

## 税関

20061218

いよいよ入国。最後の難関税関だ。何度も犬がぐるぐるとまとわりつく。

「何の目的でいかれたのですか？」

「観光と嫁さんの趣味の買い物です」

リュックを開ける、

「これはなんですか？」

「置物の木の猫と暖簾のような飾りを作る嫁さんの手芸の材料です」

係員は黙々と探っている。

「全部でいくらでした？」

「9000円くらいです」

係員は荷物をしまいながら、

「酒タバコ麻薬はありませんか？」

「全くありません」

「出口はあちらです」

と言いながら他の係員もじっと見張っている。出てしまうまでは安心できない。

出口を出て足早にターミナルへ向かった。

—  
完  
—

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2484k/>

---

上海コネクション 2006

2010年10月10日16時13分発行